

## Susan Reid: *D. H. Lawrence, Music and Modernism*

Switzerland: Palgrave Macmillan, 2019. xv + 243pp.

---

### 山田晶子

---

芸術分野の相互関係は深く、ロレンスは画家でもあって生涯に数多くの絵画作品を発表しており、展覧会にも出展していた。エッセイにおいては自身の絵画集に付けた「絵画集序論」、「絵画序文」、「絵を描くこと」、「壁に掛けられた絵」等を書いている。

これまでのロレンス研究において、ロレンス文学と絵画の関係への言及はいろいろとあり、研究書も書かれてきた。しかし、ロレンス文学と音楽の関係について一冊の研究書が書かれたのは本書が初めてである。著者スーザン・リード（以下リード）はイギリスのノーザンプトン大学で教鞭を取っていて、現在、英国D. H. ロレンス協会の学会誌 *The Journal of D. H. Lawrence* の編集長を務めている。リードが、ロレンスの人生と音楽の関わり及び彼の文学と音楽の関わりを研究して一冊の研究書を書き上げたことは、まさにロレンス研究史上のみならず、モダニズム文学史上画期的なことと言えるであろう。矚目すべき見事な書である。彼女は文学のみならず音楽にも非常に造詣が深い学者である。本書は *Palgrave Studies in Music and Literature* の一巻を成している。本書の執筆のきっかけは謝辞に書かれているのだが、それは本書の第二部を構成している“‘The Insidious Mastery of Song’: Cadence and Decadence in the Early Poems”という論文が、北アメリカロレンス協会からロレンス研究者に対して贈られる二年に一度の賞を2014年に受賞したことで、その後数年間に亘る研究の成果が本書と成ったということである。本書には、ロマン派、19世紀後半からモダニズム作家たちまでに亘って、音楽家と文学者たちの関係が広範囲に研究されている。文

学者としてはブレイク、ワーズワース、キーツ、シェイクスピア、ゲーテ、ペイター、ニーチェ、トーマス・マン、ウェルズ、プルス、ジョイス、ウルフ、ハックスレー、パウンドそしてフォスター等が論じられ、音楽家としてはシューベルト、ベートーベン、ショパン、チャイコフスキー、ブラームス、ヴェルディ、リスト、ビゼー、シェーンベルク、ストラヴィンスキー、ワグナー、ホルスト及びドヴォルザーク等への言及がある。

本書は9章から成り立っていて、第1章のロレンスの子供時代における音楽との関わりから、第7章での中期に執筆された小説『羽鱗の蛇』と晩年に書かれた戯曲『ダビデ』に及ぶ作品と音楽とモダニズム作家の関係が中心に論じられている。論じられている作品は、詩「ピアノ」、長編小説『白孔雀』、『不倫』、『虹』、『恋する女たち』、『アーロンの杖』、『羽鱗の蛇』、戯曲『ダビデ』等である。第8章は第1章から第7章までのまとめと結論であり、第9章はロレンス学者であり、かつ作曲家のアンソニー・バージェスがロレンス組曲を作曲した経緯とその演奏について述べられている。

第2章では、リードは、労働者階級出身のロレンスは言葉と音楽の関係について、同時代の特権階級の人たちとは異なった見解を持っていた、と説き、詩「ピアノ」が論じられている。彼が歌うことが好きだったり音楽を聴くことが好きだったり音感が敏感だったりしたゆえに、音楽は彼の文学に多大な影響を及ぼした。ロレンスは初のエッセイ「芸術と個人」と「調和と不調和の生涯」で音楽観を書いている。リードに拠ると、ロレンスは音楽に合わせて言葉を書くという特徴のある文学上の手法を使った。芸術が相互作用的であるというパウンドの意見がある一方で、ベルリオーズ、リスト、ワグナーの信奉する絶対音楽は音楽外の芸術からは独立しているものだ、という意見がある。ロレンスは「偉大なドイツの作曲家たちの何人かの作品はあいまいで混乱させ理解に苦しむ」(ケンブリッジ版『トマス・ハーディ研究』p. 141)として厳しく非難している。

リードに拠れば、ロレンスはパウンドと出発点が似ていて、芸術家は非日常の世界を生きるのだというロマン主義を支持している。両者とも「言葉の音における実質性」(the materiality of sound in language, *D. H. Lawrence, Music and*

*Modernism*, p. 4) を回復しようと探求を続けた。ロレンスは「言葉は一組の恋人、耳に響く一組の鐘に似ていて宇宙的なつながりの中を進むべきもの、つまり、言葉は形式、文体を持たなくてはならない」(ケンブリッジ版『トマス・ハーディ研究』 p. 140) と述べているが、リードは、この点において「音楽は完全な芸術の真の型であり、方法である」と考えているペイターの芸術観を反響している、と捉えている。

リードは、ロレンスの大学でのお気に入りの科目は歌唱であって、彼はフォークソングを歌うことが好きであった、とロレンスの幼年時代の音楽体験に言及している。彼のエッセイによると、ワーズワースやキーツやシェイクスピアやゲーテなどの「愛らしい詩」(“lovely poems,” *Ibid.* p. 26) 以上に、彼の意識には「凡庸な非国教会派の讃美歌」(banal nonconformist hymns, *Ibid.* p. 26) が深く組み込まれていた。これは母親リディアが信仰深かったための影響である。

ロレンスの妹エイダによると、兄妹が幼き頃一家では音楽を楽しむ時間があった、ピアノでショパンのワルツやチャイコフスキーを弾いたり、ブラームスの歌を楽しんだということである。父親のアーサー・ロレンスは音楽的な口笛をよく吹いたもので、小さい頃は美しい声をしていて聖歌隊の一員であった。リードは、かくしてロレンスの内面には、聖なる歌と俗なる歌の要素が合わせ入っていて、両方の性質が彼の全作品に浸透している、と述べている。

第3章では『白孔雀』と『不倫』が取り上げられている。ロレンスは手紙の中で、「僕は受身的な女性は好きではなく、カルメンのような性的に能動的な女性を好む」(『書簡集』第1巻, p. 103) と述べているが、このような女性はロレンスの妻フリーダの性格にぴったりと合致する。カルメンとは異なり、『白孔雀』のレティは能動的な生き方ではなく受身的な生き方をした結果、『白孔雀』という小説の結末は悲劇で終わるのである。リードに拠れば、ロレンスがビゼーの『カルメン』をこの小説の枠組みに用いていることは疑いの余地がないということである。

ワグナーは、ニーチェやマックス・ノルドーによって退廃的であると批判されてきた。ロレンスは手紙の中で「『タンホイザー』と『ローエングリン』は、どんな批評よりも、音楽というものを血の中で感じさせてくれる」(『書簡集』

第1巻, p. 99) と書いている。ワグナーはこのように、後のロレンスの思想である「血の意識」に暗示を与えたのである。『不倫』の主人公であるシーグモンドはヘレナとの不倫恋愛を成就できずに自殺するのだが、彼の名前は『ワルクューレ』の主人公シーグモンドと同じである。リードに拠れば、ワグナーは、エドワード朝後のパンテオンにおいてはどの作家もその力を必要とした芸術家であったのであり、ロレンスは、ニーチェによって「退廃の芸術家」と決めつけられたワグナー音楽の病的な要素、神経衰弱症性、柔弱性を小説の中で描いている。この点において、彼は社会的、そして文化的なタブーを破っていたのである。

第4章の『虹』については、リードは、特に「寺院」の章における空間と動きの均衡の描写と、「沈黙」が大きな波のように繰り返し描かれる場面は音の波に似ていると考える。彼女は、このような手法は『虹』全体について見られると捉え、ワグナーからシェーンベルグに至るまで拡大していった音楽的な発展が、どのように「リズムック・フォーム」(rhythmic form) と「広がっていく輪」(widening circle) としてのテキストの型というロレンスの思想に影響を与えたかを検証している。

第5章の『恋する女たち』では、「鼓動しながらも軋轢を生み出す前と後ろへの動き」(a pulsing, frictional to-and-fro, *Ibid.* p. 119) が見られ、視覚的及び聴覚的な「騒がしい混乱」が見られる。リードは、「言葉の彼方に」生じているものが、この小説の中心的な関心であると述べる。パーキンが説く「星の均衡」(star-equilibrium) は空間における二者の純粋な均衡を目指すものであり、これは小説の多声的な質を拡大している、と彼女は指摘し、『恋する女たち』は、「調和」と「多音」の間の裂け目を解決しようともがいている小説なのであるが、これは社会と個人の間の裂け目をいかに解決するかにつながることであり、と述べる。「星の均衡」とは、ロレンスが『恋する女たち』の中で主人公パーキンの言葉によって述べているものである。その思想は、星と星が引き合いながらも決して衝突をしないように、男性と女性の関係も鈞合を保ちながら相手を支配することなく、自立し互いを尊重して生きる関係をいう。パーキンの言葉を引用すると、「不思議な関係……二つの単独の存在の純粋な均衡——星が互

いに釣合を保つように」(“a strange conjunction ... a pure balance of two single beings:—as the stars balance each other,” *Women in Love*. Cambridge Edition, p. 148)である。ロレンスの「星の均衡」という思想は、男性と女性の関係ばかりではなく人間と人間の関係全てにおいて当てはまるものである。

ロレンスは、ワグナー主義を、死を伴う愛であると認識していたが、多くの批評家が『恋する女たち』におけるワグナー的要素を指摘している。ジェラルドの死がそれを表している。しかし、彼の死は単に個人的な恋愛の失敗というよりも、当時の社会が第一次世界大戦によって死を意識させられていたので、リードは、ジェラルドの死を機械文明に支配された社会的な死を象徴するのではないかと捉えている。

第6章では『アーロンの杖』が論じられている。戦争はロレンスにとって「絶え間なく侵略する産業の音と融合して、当時の音楽への完成に影響を与え、戦争中と戦後は大規模な統一された音楽から転向するという影響を与えた」(*D. H. Lawrence, Music and Modernism*. p. 148)とリードは述べている。1922年に書かれた『アーロンの杖』の主人公アーロンはオーケストラのフルートの奏者であるが、リードはこの小説をシューベルトの『冬の旅』と比較している。『アーロンの杖』は冬、戦争、音楽が結合しているので、シューベルトの『冬の旅』と関連していて、ロマンチズムを内包している、と説く。

『アーロンの杖』では『アイダ』にも言及されている。ロレンスは「砂」という暗喩をこの小説の中で用いているが『アイダ』のエジプトの砂を喚起していて、文明の虚しさが喚起されている、とリードは指摘している。彼女のこの感受性の鋭さ、想像力の大きさ、深さはロレンスのそれに匹敵すると言ってもよいであろう。偉大な批評家や研究者には、このように生まれつきのセンスの深さや鋭さも必要なかもしれないと思われる。『アーロンの杖』は、かくしてヴェルディやワグナーの騒々しい壮麗な作品から退いてソロの歌の再生へと向かっていることを示している。ロレンスやウェルズは、戦争によってワグナー的統一のある音楽の理想が破壊されたことを見たのである。

第7章では『羽鱗の蛇』と『ダビデ』が論じられている。アメリカへ渡り、更にメキシコへ渡ったロレンスは、ヨーロッパの音楽とは異なった音楽体験を

した。ネイティヴ・アメリカンの歌のリズムは、打ち付けるドラムの音に合わせて詠われる「詠唱」(chants) というべきものであり、「創造的なエネルギー」を生み出すものである。リードは、ロレンスのアメリカの音楽評価をドヴォルザーク、コップランド、チャベツの音楽と比較し、また「原始性を備えたもの」(primitivism) と推定される彼の音楽のリズムをストラヴィンスキーのリズムと比較して、『羽鱗の蛇』と『ダビデ』に書かれた音楽と文学の関わりを考察している。『羽鱗の蛇』においては、夜明け、太陽、日没、闇というような自然のリズムが時間を生み出しているのであり、モダニスト音楽における身体的表現方法と関連している。

『ダビデ』は、『羽鱗の蛇』と同じくメキシコで生まれた戯曲で、アリゾナやニューメキシコのネイティヴ・アメリカンの宗教的精神や音楽を源としている。ロレンスの名前はDavid Herbert Lawrenceであり、『ダビデ』の主人公である聖書中のダビデはロレンス自身と重なった人格造型をされている、とリードは指摘している。『ダビデ』について、ロレンスはこれが「文学」として読まれるよりも、見られ、聞かれることを願っていた。『ダビデ』のためにロレンスは作曲をしている。歌が最も重要であって、ダビデは歌手として書かれている。

リードは、ロレンスはストラヴィンスキーの『春の祭典』のプリミティヴィズムの浅薄さを批判しているが、「言葉の音の彼方」に意味を求めた「芸術分野の相互関わり」(inter-arts) というモダニズムの流れに参加していた、と述べている。

文体は、音楽的文学の要素を持ったモダニズムにおいて重要なものであった、と彼女は指摘している。ハックスレーの『恋愛対位法』やジョイスの『ユリシーズ』の「サイレン」の章やウルフの「弦楽四重奏」はオーケストラ音楽をモデルとしていると認知されている。一方でロレンスは、これらの作家のような音楽的モダニストと並び称されてはいない。

文学上のモダニズムにおいて、批評家たちが交響曲の形式を好んだことは、フォースターをも比較的過小評価することに繋がっていた。フォースターは、ロレンスが吟遊詩人的素質を持っていて、歌が人間性を支配しているただ一人の同時代の小説家である、とその才能を認めていた。そしてフォースターは、

ロレンスをポルダーやブレイクの伝統上に並べているが、リードは、更にイエイツやパウンドも同じ線上にしていると考えている。

以上を書いたように、リードは、ロレンスと音楽と文学作品の関係を論じて、そのモダニズム文学における特徴を詳細に検証している。ロレンスが、画家として絵画や彫刻に関心を持っていたように、音楽にも広く深く通じていて作曲もしていたことの重要性は、本書によって改めてはっきりと認識される。『ダビデ』のために彼は10の曲を作曲したのであり、その楽譜はケンブリッジ版の『ダビデ』に掲載されている。また、彼の多くの詩は、歌えるように様々な作曲家によってメロディが付けられた。本書の「補遺」によると、ロレンスの詩に合わせて作曲された歌の数は100曲以上あり、ロレンスの人生と文学が、いかに歌と深い関わりがあるのかが理解されるであろう。

人間は自己主張ばかりして他者から孤立しては生きていけない。ロレンス文学の中心を成す主題は「個」と多様な「他者」の調和の重要性であり、更には人間や生物の宇宙的な「均衡」と「調和」であった。リードは一作品全体を通して音楽の形式が関わっている詩、小説、戯曲を論じている。一方で筆者には、ロレンスの作品はほとんどにおいて部分的でも音楽への言及が入っている、と思われる。『チャタレー卿夫人の恋人』の第10章で、メラーズとコニーが裸体のまま森の中を雨に打たれながら踊る場面は、雨音が音楽のリズムを作り出している、と言えるであろう。ここに自然と人間の一体感が出ていて、ロレンスの主題が描かれている。また、『ミスター・ヌーン』でも均衡の重要性が言及されているし、中編小説『逃げた雄鶏』でも自然と人間の壮大な調和が謳われ、リズム感（音楽）がある文章と、作者の絵画的感受性の目で捉えた色彩感豊かな文章が美しい。このように、宇宙的な均衡と調和を主題とするロレンス文学は、音楽を響かせているのである。詩にはリズム（音楽）がある。ロレンスの作品は小説あるいは散文でさえもが詩的なのである。